

第三百十二回 青葉会

平成二十四年三月二十二日(木) 午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉

〈投句〉

〈紙上選句〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯 山崎亜也 山内天牛
伊賀山そらお 石川清 小川恭延 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 橋口隆 福島正明
古田昇 南平和夫 宮内規雄 渡邊盛雄
赤田堅 小川恭延 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明 村田くに子
山崎青史 山本三恵

ゴシックは選者の天

《選者吟》

春昼の別れ互(かたむ)に振り向かて
亡きひとの誕生日晴れ梅匂ふ
老松の松に凭れて花一つ
旅の果て南下ひそかな流水群
辻々に別れ難なの卒業子
万里子 (紀・恭・龍)
全 (堅・紀・敏)
全 (堅・ゆ)
全 (龍)

《互選句》

八点 振るたびに違ふ音たて種袋

弘子 (猛・忠・孤・ゆ・一・正・天)

・三)

六点 ☆ サキソホン吹く後れ毛や風光る

ゆたか (万・孤・一・允・く・亜)

☆ 砂搔いて軍鶏(しゃも)も高鳴けり芽吹晴

一灯 (万・恭・弘・ゆ・く・青)

(青：軍鶏の力強い様が良く詠まれています。「搔いて」がややぬるので「飛ばし」では?)
黄砂降る元寇船の眠る海
昇 (猛・孤・一・允・正・青)

(青：昔の神風が今は黄砂を運ぶ)

☆ かくれんぼぼたりと椿落ちにけり

規雄 (万・恭・孤・敏・一・三)

五点 干大根残る浜辺や風優し

そらお (万・堅・恭・天・三)

点滴もやうやく終り日脚伸ぶ

全 (万・猛・允・く・亜)

昔から実存主義者土筆坊

正明 (紀・孤・龍・亜・三)

四点 春寒や切りそびれたる啖呵あり

恵洲 (允・く・亜・青)

(青：啖呵を切りそびれると口惜しいものです。その夜は眠れなかつた?)

☆ 梅を嗅ぐ鼻のピアスを光らせて

一灯 (万・忠・敏・ゆ)

露味噌の焦げ香ばしき焼むすび

全 (弘・敏・ゆ・允)

朝靄を裂いて初音の届きけり

猛 (恭・龍・青)

(青：威勢の良い初音。「届きけり」は甘いので、「耳を衝く」では?)

犬小屋の噛み跡に触る彼岸かな

忠彦 (弘・敏・亜)

(☆触る↓触るる。or触れ)

☆ 春耕や畦のラジオに歌謡曲

一灯 (万・恭・三)

安曇野へ急(せき)くアルプスの雪解水

全 (猛・允・青)

(青：非常にきれいな句)

☆ 曇天の照度(ルクス)の高さ春きざす

亜也 (万・弘・三)

☆ こだはりの和竿手入れす水ぬるむ

全 (万・正・天)

(☆↓和竿に。or和竿手入れし) (正↓愛用の和竿の手入れ水温む)

志ん朝一門会

二点 志ん輔の音曲嘶山笑ふ

紀久男 (敏・天)

☆ 養生の身につれなくも冴返る

恭延 (万・ゆ)

(☆つれなくも↓表現方法もう一工夫)

選抜高校野球

罹災地の選手宣誓春開く

全 (堅・忠)

雛の日や元マドンナと歌舞伎観る
非運にもめげず卒業君大き
春の夜金木火土星並び見ゆ

(☆:見ゆは不要)

蝶も鳥も死に場所見せぬとふと思ふ
春大河のたりのたりと外輪船
年金の暮らしに慣れて蜆汁

(青:質素が一番。蜆は栄養豊富で美味)

シリウスも瞬き減りて春の星

料峭(リッオチアオ)の語感確かむ支那語辞書

一点

春寒し泣く子あやしつ喉治療

☆春風や曾孫のはしやぐ義母の葬

やつと梅どつと釘煮の届きけり

今日の風春随(したが)えて芳(かくむ)しき

目には花粉山はうしやのうはる余震

繕ひの板の木の香や春の雪

ケンブリッジ

風光り聖歌をこぼすチャペルかな

ロンドン

春の朝地下鉄(チューン)は人種の坩堝なす

春雷や魚おろせし細見の刃

刈込みに上手く飛び込む春の鳥

懐の深き人柄チューリップ

春寒ししやれた服着る遺影かな

泣きじやくる子の聲ひびき税申告

休み田の虚空に揺れる雲雀かな

菜の花や吾も蕪村の影を踏む

忠彦 (紀・正)

健介 (猛・忠)

全 (忠・垂)

惠洲 (猛・正)

和夫 (堅・一)

昇 (く・青)

亜也 (弘・龍)

全 (紀・正)

清 (紀)

紀久男 (万)

全 (堅)

猛 (龍)

忠彦 (紀)

弘子 (く)

堂哉 (天)

全 (天)

ゆたか (一)

隆 (紀)

正明 (孤)

天牛 (忠)

全 (弘)

盛雄 (紀)

全 (三)

●次回青葉会

四月二十六日(木) 午後六時〜九時

(丸紅 談話室)

▲当季雑詠各自五句。投句は二句

●今年度会費集めますので宜しく

五月二十四日(木)

六月二十八日(木)

以上 文責 紀久男

平成二十四年三月句会報

一 今回は四ヶ月ぶりの天牛さん含め9名出席。投句は12名。孤舟さん寄贈の「爽樹」3月号、一灯さんの「炉火」(伊吹嶺関東支部合同句集I)、小生の「俳句あるふあ」3-4月号(毎日新聞)、和夫さんからの「読売新聞記者が見つめた東日本大震災300日の記録」を回覧しつつ開始。三恵さんの山形土産「初孫・魔神生原酒」(酒田)、天牛さんから美々卯の凍結酒「福寿」、弘子さんの「池月」(能登)と最中(川越の亀屋)、先生の豆腐ケーキと焼栗(吉祥寺)そして「さくら万頭」(一ヶ月遅れの誕生祝)、一灯さんのマカロン(国立のレ・アントルメ)、小生の吟醸「笹川・ほろ酔」(郡山)と盛り沢山の寄贈を呑み食いし乍ら料理・ビールも注文。栗野俊助さんの訃報等話しつつ、御覧のように弘子さん、一灯さん、ゆたかさん、昇さん、規雄さん、さらおさん、正明さんが高得点でした。

二 関係者近詠

年忘れ曾て吾等は挺身隊	万里子	同室の患者それぞれ春を待つ	規雄
一人つ子は曾祖母三人女正月	全	――「NHK俳句」四月号 高野ムツオ選	
再生や樹下に落葉を敷きつめて	全	ヤ行までたどり着きたる賀状書き	丹野敦雄
早梅の含む彼方の空青し	全	――「俳句」四月号 大牧広選(秀逸)	
冬韭の生を掴み噛む甘さかな	全	露の臺希望があれば生きられる	正明
野球部の駆ける校庭寒の月	全	原発を頼る文明春愁ひ	全
児と共に聖句暗唱水仙花	眞希子	サボテンの花のやうなる恋に墜つ	全
冬すみれ叱りつすでに赦しをり	全	適当な人間隔水芭蕉	全
客送り去年の続きを讀初め	全	隠し事したこと無いソーダ水	全
葬列の端に霜焼痛痒し	全	――「夏草」第十二集	
富士塚の富士の天辺初雀	弘子	文机に頰杖の影桜桃忌	一灯
初夢へみな生き生きと逝きし人	全	おほどかに土偶の乳房夏に入る	全
書初めの愛といふ字の難きこと	全	西日射す書架捨てきれぬ資本論	全
冬草の深き根ざしや句碑据わる	全	秋待つや産み月近き束ね髪	全
目覚め時包む静寂雪ならむ	恭延	春疾風船解体の火花飛ぶ	全
隧道を出づや車窓に冬日燦	全	――「灯火」第一集	
凍れる夜ベツドのパイプ冷えに冷え	和夫	残酷な追伸一行花便り	青史
若布刈る大海原の朝の潮	全	勿忘草ひとと乗せて置手紙	全
老犬の往生あつぱれ寒い朝	忠彦	春灯や廃業多き荒木町	紀久男
初笑ひ闇夜の捕物三味線(しゃま)に乗り	紀久男	春の旅俳句肴に酒の蔵	全

(菊五郎の道玄)

――「萬緑」四月号――

三 NHKラジオ折り込み都々逸(最終放送に入選) 兼題「ほほえむ」

ホームで汽車待ちやホケキョと鳴いた餌台嬉しい無人駅 恵洲

四 先生の添削(規雄さんの病床吟)

病院の庭にも小(ち)さき冬の空

↓「も」は句意を曖昧にするのでトル。小(ちい)さき

まさかまさか病院で聖夜迎へる

↓「病院でまさか聖夜を迎へむか」

病み上がり力水飲み春を待つ

↓「春待つや力水飲む病み上がり」

病棟や山茶花重く咲いている

↓「病棟の窓に山茶花咲き重(おも)り」

…病氣した時の寡男暮しの厳しさと俳句を続けていて良かったとつくづく感じておられる由です。